

『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「生物基礎」，『生物』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

「生物基礎」

1 前 文

「生物基礎」は、日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）21 ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

今年度は、学習指導要領に定める項目である、「生物の特徴」，「ヒトの体の調節」，「生物の多様性と生態系」の3分野の全てから出題され、昨年度の共通テストと同様、同じ大問の中にあって分野をまたぐような問題の出題はなかった。

内容については、探究的な要素を含む設問や、日常的な生活に関連した設問などが中心に構成され、基礎的な知識を問う問題であっても多面的な理解を求めるなど、共通テストの趣旨に則ったものであった。また、初見の表や図であっても、教科書の知識を活用することで解くことができる設問が多く見られた。このような出題の方向性は、「高校の教育課程で習得した内容が定着しているかを客観的に測る」という共通テストの意義からも、「日常の学習にしっかり取り組んで思考力を付けて臨めば結果が得られる」という受験者へのメッセージではないかと考えられる。学校現場においても、今後もこのような出題傾向が継続することを望んでいると思われる。

第1問Aは、日常生活で口にすることがある食品に含まれている乳酸菌やコウジカビの細胞の構造体を問う問題と真核生物の代謝を問う問題、第1問Bは、ゲノム、アミノ酸、遺伝子などの用語の理解を問いつつ、遺伝子やアミノ酸、塩基対の数の関係を問う問題であった。問3では酵母の細胞小器官の主な働きを過不足なく選ぶ設問であった。記述の中にある「染色体の凝縮」については、細胞周期の範囲で一部教科書に明記されているが、染色体の凝縮の仕組みについては生物基礎の学習範囲ではなく、同化や異化と一緒に扱われたことで、受験者が解答に戸惑う内容だったと思われる。第1問Bは、遺伝子の数、DNA の塩基数、アミノ酸の数の関係性をしっかり理解できれば正答を導くことができる良問であった。問6では、二つの条件で大腸菌をそれぞれ培養した実験を行い、その結果から遺伝子発現に関する考察の組合せを選ぶ設問であった。実験の考察を考える設問で、数が関わってくる場合には、表にまとめられていることが多い。そのため、受験者の半数が遺伝子の数に対して、mRNA の総数が条件によって増減している結果から安易に、「ゲノムに存在する遺伝子の数が変化した」という記述を選んでしまったのではないかと考えられる。この設問は、結果を分析する思考力、判断力だけではなく、探究活動でも必要となるデータを整理する能力も問われている良問ではないと思われる。

第2問Aは、ホルモンの働きと血糖濃度の変化の関係を問う問題、第2問Bは、日常生活で罹患することがある病気からヒトの体内で起きる免疫応答を問う問題であった。問2は、すい臓から分泌される二つのホルモンの基礎的な知識を問いつつ、教科書で詳しく取り上げられることが少ない

運動中と運動後の血糖濃度とホルモン濃度のグラフを読み取って解く問題であったが、生物基礎で扱われる思考力、判断力、表現力等を求める問題の難易度として適当な問題であったと思われる。問6は、ハチ毒によるアナフィラキシーショックの症状を治療した後の血圧と心拍数の変化を問う問題であった。新課程になってから、心臓や血管を取り扱う内容が激減したことにより、血圧と血管の関係について理解していない受験者が少なくなかったのではないと思われるが、血管の収縮と拡張が血圧にどのような関連性があるかを正しくイメージできた受験者は正答を選ぶことができた良問であったと考えられる。近年、エピペンを所持している児童・生徒が増加していることもあり、身近な事象でありながら受験者や授業担当者の盲点を突いた問題だと思われる。

第3問Aは、雑木林で繁茂しているササが林床の草本に与える影響について、対照実験の結果から考察されることを問う問題、第3問Bは、土壌生物の種類や数に影響を及ぼす条件について、調査結果から考察されることと、結果から得た仮説を検証するための実験計画を問う問題であった。

3 分量・程度

今年度は、大問数は3で、大問ごとにA、Bの中間が設定される形式であり、解答数は合計17であった。大問数、中間数は昨年度と同じ、小問数は昨年度より1増えて16、解答数は昨年度よりも減って17であった。ページ数は18ページ（下書き用紙ページを除く）で、昨年よりページ増加した。受験者にとって分量としての負担感はそれほど大きくはなかったと考えられる。

設問数や各設問の文字数などは、適当な分量であったと思われる。取り扱われた題材の多くは、教科書で学習する題材が多く、目新しい題材であっても本質的には分かりやすい内容であった。個別の設問の難易度も標準的な設問が多かった。受験者にとって今年度の問題も取り組みやすかったと思われる。

第1問Bの問4は、ゲノムやDNA、遺伝子発現に関する基礎的な知識を問う設問であったが、選択肢の中に「塩基対の数」や「塩基の割合」などの定番な内容が複数含まれていたことで、誤答を選んでしまった受験者の割合が高くなったと思われる。しかし、問題の内容は教科書の知識を活用すれば正答することができる問題であったため、引き続き、工夫を凝らされた選択肢が望ましい。問5は、ゲノムの大きさを求めるために、問題文で与えられているアミノ酸の数、遺伝子の数、遺伝子の割合を計算で用いるが、アミノ酸を指定するコドンに対応する塩基の数を計算に加えなかったことや、安易に与えられた数だけで計算してしまったことで誤答を選んだ受験者が多かったと考えられる。生物基礎における計算問題は、与えられた数だけでは正解を導くことができない問題が出題される傾向があり、思考力、判断力だけではなく、深い理解力も問われていることを忘れてはならない。

第3問Bは、土壌動物の分類群と個体数の表、三地点の分類群の数のグラフ、三地点の環境をまとめた表の三つを読み取らなければならない問題であったが、土壌動物の図があるなど読み取りやすい工夫がされており、受験者にとって取り組みやすい設問であったため、ほとんどの受験者が正答を導くことができたのではないと思われる。また、問3で結果の解釈を整理したことにより、問4の仮説検証のための対照実験の条件の情報をまとめやすく、第3問Bは、よく練られた良問であったと考えられる。

第3問Bを含めた令和7年度追試験において、令和6年度の生物基礎の反省を意識し、見やすい図やグラフの大きさ、配置など受験者ファーストで作問されたと思われる。

4 表現・形式

全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。

形式的には、六つの中間のうち1問で探究の過程に沿った出題がなされており、実験の結果から条件を推察して探究を深めていく問題形式であった。また、今年度は、会話文を用いた設問は出題されなかった。

設問全体のうち、知識・技能を問うものが7問、思考力、判断力、表現力等を問うものが9問であった。出題形式としては思考力、判断力、表現力等を問うように見えても、実質的には比較的平易な知識・技能を問う問題が多かったように思われる。六つの中間のうち、第1問Aの間1の原核生物と真核生物の細胞の構造体、第2問Bの間4の感染の初期段階における免疫のはたらきについてなど、四つの中間の最初の設問は、その分野の基礎知識を問う問題が設定されている。このような問題形式は、受験者にとって中間を解き進めるための必要な知識をまとめる時間となり、円滑な解答につながると考えられる。

選択肢の数は、4択が5問、5択が3問、6択が5問、7択以上が3問であり、平均は5.5であった。また、第2問Bの間5、間6は8択の設問であり、受験者の理解度をより正確に評価するためには、問題を分けて設定することや、部分点の設定をするなどが望ましいと考えられる。

選択肢の形式については、「間違い探し」が2問、「組合せ」が5問、「過不足なく」が1問であった。このうち、受験者を悩ませる「過不足なく」の設問であった第1問Aの間3は、細胞小器官Xの主な働きに関する記述を選ぶ問題であった。記述の文章の末尾が「に關与する」という表現ではなく、「が行われる」など教科書で使われる表現であれば、上記で述べた「染色体の凝縮」についてもそのままの表記で、受験者も解答ができるような設問になったと考える。「組合せ」の設問であった第2問Aの間3は、リード文の「インスリン濃度は健康な人とほぼ同じであった」という部分を見逃さなければ、**ア**に入る語句として「合成」「分泌」を除外できる。しかし、受験者にとってすい臓におけるインスリンの合成と分泌をはっきりと区別することが困難であると思われるため、「分泌」と「受容」を含む4択の設問で良かったのではないかと思われる。選択肢は、受験者にとって有用な思考を必要とさせる形式となるよう、引き続き十分配慮していただきたい。

第1問Aの間2は、真核生物の二つの代謝の過程に関する記述のうち、どちらか一方の過程のみに該当するものを選ぶ形式の問題であった。この設問では、選択肢が二つの代謝のどちらかに必ず当てはまるため、片方だけの知識では解答することができず、受験者の知識力と思考力、判断力を問う良問であったと考えられる。

第2問Bのリード文の前半は、インフルエンザのように毎年流行している病気を取り上げており、日常的な内容になっているため、受験者も問題に取り組みやすい。しかし、リード文の後半は、前半と同じZさんがスズメバチに刺され、アナフィラキシーショックが起こった様子が書かれている。「からだを揺さぶると応答したもののすぐに眠り込む」など状況が生々しいため、実際に本人もしくは家族が同じ状況になった受験者にとって心理的負荷を与える内容ではないかとする。問題の場面設定に当たり、災害や疾病などセンシティブな内容を扱う場合には、受験者が解答するために必要な情報だけに抑え、情報を盛り込むことを避けるなど、受験者が必ず目にするリード文の内容については十分配慮していただきたい。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストも、共通テストの問題作成方針をしっかりと反映したものとなっていた。特に、実験結果から合理的な推論のみを的確に考察する設問だけでなく、実験結果から考察される仮説を検証するための実験計画を考える設問など、より科学的に探究する資質・能力が問われる傾向になってきており、今後もその傾向は続くものと考えられる。今回の共通テストから、新課程

で学習してきた生徒が受験者となった。学習指導要領で示された主体的・対話的で深い学びを学校現場では少なからず実践してきた。文系の受験者が多い生物基礎において、科学的に探究する資質・能力が問われる設問で、成績中位層から上位層の受験者が誤答を選ぶ割合が多くないことは、一つの成果ではないかと考える。しかし、段階的な思考や深い理解を求める設問だけではなく、基礎的な知識を問う問題で正答率が低いことも注目すべきである。このことから、学校現場では、科学の基本的な概念や原理・法則に関する知識を定着させることを意識し、さらなる理解を深める授業とともに、探究活動を生徒主体となって取り組むために必要な資質・能力を育む授業のさらなるブラッシュアップが求められている。

○意見・要望・提案等

来年度への意見・提案・要望に関しては、令和7年度共通テスト本試験の「生物基礎」と同様であり、以下のとおりである。

受験者が習得した科学の基本的な概念や原理・法則に関する知識を問う問題、得られたデータや図から正確な考察や判断ができることを問う問題、そして習得した知識を活用した探究をすることで科学的なものの見方や考え方を問う問題がバランス良く出題されるようお願いしたい。また、難易度や各設問のレイアウト、大問の順序なども踏まえて、「生物基礎」の問題全体において、引き続き適切な出題をお願いしたい。

理科の基礎を付した科目の中で、受験者が最も多い「生物基礎」は、学習指導要領の理科の目標である「自然の事物・現象に対する関心や探求心を高め、科学的に探究する能力と態度を育てる」ことに最も影響力のある科目とも言える。そのため、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、引き続き問題の難易度を調整していただきたい。

今年度の共通テストも、これまでに実施されてきた共通テストと同様に、受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたこと、本委員会の提案を真摯に受け止め、改善に向けてしっかりと取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

最後に、今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように引き続き配慮をお願いしたい。

『生物』

1 前 文

「生物」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）21 ページに記載の 8 つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

内容については、「令和 7 年度大学入学共通テスト問題作成方針」にのっとり、「科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、科学的に探究する過程を重視する」ことを背景として、基本的な概念や原理・法則の理解を問う設問とともに、観察、実験、調査の結果などを総合的に分析し解釈する力を問う設問が作問されていた。加えて、高等学校における探究の過程を意識した出題により、受験者の知識・技能や思考力、判断力、表現力等を総合的に問うことができていた。昨年度より、教科書等で受験者が学んだり目にしたりする資料を主に用い、その上で既知でない要素を含むようにするなど、制限時間内に多くの受験者が解答できるような工夫がされており、今年度も踏襲されていた。

範囲については、学習指導要領に定める項目である、「生物の進化」、「生命現象と物質」、「遺伝情報の発現と発生」、「生物の環境応答」、「生態と環境」の 5 分野のすべてから幅広く出題されていた。また、昨年度と同様、分野横断的に異なる分野の見方や考え方の設問を組み合わせた問題構成が図られていた。

第 1 問は、シャペロンを題材とし、タンパク質の立体構造と遺伝子の発現調節を扱った分野横断的な内容であった。シャペロンは、一部の教科書では本文太字として扱われているが、一方で一部の教科書では参考として扱われている発展的な内容であり、偏りが見られた。問 1 は、表面的ではない本質的な知識を問う良問であった。問 3（1）は、多段階思考が必要な問題となっており、受験者にとっては難問であったと考えられるが、思考力、判断力、表現力等を測るとして良問だったと考える。問 3（2）は、仮説検証型の実験を取り扱った内容であり、高等学校での学びを意識したものとして評価できる。加えて、問題を通して解き明かされる機序は、受験者にとって興味深い内容であったと思われる。しかし、選択肢となる仮説を 4 つ提示し、「結果から支持される仮説として適当なもの」を選ぶことについては、探究の過程を再現する作問として課題が残ると考える。

第 2 問は、無機窒素化合物を題材に、代謝や生態系の内容を扱った分野横断的な内容であった。植物生理や生態系を理解するにあたり、窒素を中心に据えた視点は重要であるが、現行学習指導要領では窒素の循環が生物基礎から生物に移るなど、高校教育での扱いには変化が見られた。そのような中で、共通テストで窒素を題材とすることは、窒素に再び注目を集める点で意義深いと考える。一方で、多くの受験生にとって、あまり馴染み深い分野ではなかった可能性がある。

第 3 問は、眼を題材に、分化の仕組みと構造及び視覚中枢への経路を扱った分野横断的な内容であった。問 1 では、「色素細胞層」について述べた選択肢があったが、この用語は受験者にとってかなり細かい知識であったと考えられる。問 2 は、遺伝子の発現調節と発生の学習項目の中でも、重要な考え方を扱っており、受験者の論理性を測る上でも良問であった。問 3 は、教科書で取り扱わ

れている内容が、どのような仕組みでそのようになったのかを解き明かす問題となっており、受験者にとっても興味深い内容だったと思われる。今後も、教科書の内容を深めるような問題を期待したい。

第4問は、動物の危険回避を全体の題材として、2つの中間A、Bから構成されていた。Aは、ナメクジをテーマに神経や筋肉、学習を扱った内容であった。実験材料として、日常的に目にする野菜を用いるなど、受験者にとって理解しやすい工夫が見られた。Bは群れをテーマとして扱った内容であった。問4の値の増減は、実際は状況等によって変わりうるものであるため、下線部(C)が成り立つことを前提として考えることを徹底する必要があった。これは、仮説演繹法的な思考であり、探究の過程を繰り返し学ぶことで身に付けることが期待される、論理的思考力や問題解決能力を測るための問題と考えられる。

第5問は、鯨偶蹄目の頭部の角を題材として、生物の進化と個体群を扱った内容であった。問1は基礎的な知識を問う問題であったが、しっかりと学んできたかどうか为正答に反映されやすい内容であるため、識別力は高いと考えられる。問2、問3及び問4に見られる表やグラフの読み取りについても、思考力、判断力、表現力等を向上させる学びをいかにしてきたかが正答に反映されやすい内容であったと思われる。

3 分量・程度

分量について、大問数は5で、第4問にのみA、Bの中間が設定される形式であった。大問数は、昨年度より1つ減少した。設問数は合計19で、昨年度より2つ減少した。解答数は合計25で、昨年度と同じであった。下書き用紙を除いた総ページ数は、昨年度より5ページ増えて31ページであった。全体として、見やすいレイアウトを追求した結果としてページ数は増えているものの、情報量が格段に増えたわけではなく、適正であったと言える。昨年度は、情報量過多と評価された過去の出題から適切な改善が見られ、今年度も昨年度同様、多くの受験者が制限時間内に解答を終えられるよう配慮がなされていた。

程度については、全体として昨年度及び本試験と同程度の難易度であり、得点率もほぼ同程度と推察される。昨年度及び本試験と同様に難易度と得点率がおおむね望ましい範囲にあると考えられる。大問ごとに評価すると、第2問は難しく、第5問は易しかったと思われるが、全体のバランスが良く、受験者の学力を適正に評価できる難易度であったと思われる。

第1問の問2は、シャペロンの働きについて問う問題であり、シャペロンの知識がなくてもリード文に「異常な立体構造を修復する」と記されていることから、タンパク質の構造についての知識と関連付けて解答することが可能である。しかし、知識の正確さが求められる問題だったことに加えて、多くの受験者にとって情報が十分ではなかったと考えられるため、難易度は高く、正答率は低いと思われる。問3(1)、解答番号4は、図の左右どちらが5'末端であるかを判断し、減少したアミノ酸をコードする塩基の数がいくつかを計算し、フレームシフトにより生じた終止コドンの位置を見出す、という正確な知識理解と段階的な思考が必要な問題であり、難易度がきわめて高く、正答率はかなり低いと思われる。

第2問の問1は、やや深めで光合成と呼吸の本質的な理解につながる知識を問う問題であり、良問だった。一方で、問2(1)は、窒素同化の生理機構について、教科書本文に見られないような細かい知識が求められ、また、思考、判断するための情報も不足していたため、難易度がきわめて高く、正答率はかなり低いと思われ、受験者の学力を識別しがたい問題であったと考えられる。同様に、光合成及び窒素同化の知識を基に思考力、判断力、表現力等を問うた問2(2)においても、代謝機構に関する深い知識がなければ完全に正答することは難しく、正答率はかなり低いと思われ、

受験者の学力を識別しがたい問題であったと考えられる。

第3問の問2は，教科書で身に付けた生物学的概念を基に，思考力，判断力，表現力等を測ることができる良問であり，識別力は高いと予想される。

第4問の問3は，前後の文脈から，イに入る語句として「触角の感覚神経」を選んでしまった受験者が多くいることが予想され，正答率はかなり低いと思われる。

第5問の問2及び問3は，難易度が低く，正答率は高いと思われる。分子生物学的な手法を盛り込むなど，さらなる工夫を期待したい。

4 表 現・形 式

表現について，全体として受験者にわかりやすい表現が用いられており，理解しやすいものであった。また，レイアウトに工夫が見られ，すべての問題において見開きで完結するものとなっていた。

形式的には，短めのリード文から設問へとつながるオーソドックスな作りが全ての大問に見られた。なお，リード部分に会話文が用いられた問題はなかった。

知識，技能及び思考力，判断力表現力等を問う問題のバランスについては，設問全体の解答数25問のうち，知識，技能を問うものは10問，思考力，判断力，表現力等を問うものは15問であり，昨年度の追・再試験に比べて思考力，判断力，表現力等を問う問題の割合が増加した。

選択肢の作り方について，設問全体の解答数25問のうち，択一問題の選択肢は，4つもしくは5つであり，各問の文章量は多すぎず適切であった。一方，「誤り探し」は1問，「二つ」は6問（3組），「組合せ」は8問，「過不足なく」は4問であり，多くが正答を選ぶにあたって時間を要する形式であったが，簡潔かつ明瞭な表現により，受験者にとって過度な負担を与えるものではなかったと考えられる。また，今年度も，部分点を与える問題が2問見られた。部分点は，受験者の学力をより高い精度で識別できる上，設問当たりの配点を実質的に減じられる利点があるため，同様の工夫がなされる作問を今後も期待したい。

第1問では，リード文に，高温などによるタンパク質の立体構造の変化や，シャペロンAの調節に遺伝子Xが関わっていることなど，その後の思考力，判断力，表現力等を問う問題を考えるのに必要な情報が簡潔かつ明瞭に示されていた。問3(1)では，解答番号が2つに分けることで，段階的思考を誘導する工夫が見られた。問3(2)は，仮説検証型の実験を扱った内容であったが，探究の過程を重視するのであれば，実験の内容の前に仮説が提示されるレイアウトが望ましいと考える。また，同問では，タンパク質Xが調節タンパク質だと判断することが必要となるため，リード文の下線部に「シャペロンAの調節には，」が含まれていると，より受験者が本質的な考察を行う手助けになったと考えられる。

第2問の問2(1)及び(2)は，図1としてグラフが示されているものの，そのグラフから読み取ることが問題文中に記述されており，受験者のデータの傾向や規則性を解釈する力を判断する問題ではなかった。グラフを有効活用した設問，もしくは設問を解く上で必要な情報を盛り込んだ表現を期待したい。

第3問では，教科書で扱わない内容を含んでいたが，わかりやすい図が随所に見られ，受験者の心理的な壁を取り払うのに有効であったと考えられる。問2では，実験の結果として示された表1において，情報がやや意図的に絞られすぎている印象を受けた。情報量やレイアウトとの兼ね合いで難しい部分もあるかとは思いますが，探究の過程を重視するのであれば，仮説検証で考えうる実験項目全てを表に載せてもよいのではないかと考える。

第4問の問3において，前後の文脈によって正答率が低くなったであろうと前述した。空所補充

を求められた文章は、非常に簡潔かつ明瞭にまとめられていたが、その表現がかえって受験者にとってはわかりにくかったと考えられる。本問においては、シナプス可塑性を想起できる、より詳しい記述が必要であったと思われる。また、問4においては、群れの個体数の増加に伴う変化を文章で表現していたが、グラフなどの表現を用いることでより具体的な状況設定が可能だと考えられる。

第5問では、生物の進化を扱う問題が配置されている。現行学習指導要領では最初の編として生物の進化と系統が配置され、最後の編として配置されていた旧学習指導要領と大きく異なっている。そのため、最後の大問である第5問に生物の進化の内容が登場する展開は、旧教育課程履修者にとってなじみのあるものだったと考えられる。このように、現行及び旧教育課程履修者による差異が生じることに加えて、ほとんどの大問が分野横断的な内容となっていること、さらには共通テストがマークシート形式であることを鑑みると、大問の出題順は必ずしも学習指導要領の内容順でなくても良いのではないかと考える。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、昨年に続き共通テストの問題作成方針の意図を色濃く反映したものであった。高等学校の授業改善については、教師主導の一斉授業から、生徒が主体の探究的な学びへの転換が少しずつ定着しつつある。語句を暗記するだけでなく、その知識を活用して思考・判断し、表現する場面や、対話を通して概念や原理を深く理解する場面、探究的な学習を通して、自らの経験と結びつける場面等、生徒が主体となる学びの場면을授業中に増やしていくことが引き続き望まれる。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成についての、意見・提案・要望に関しては、共通テスト本試験の「生物」と同様であり、以下の通りである。

受験者が、日頃の授業を大切に学習を進めた成果が正しく反映される基本的な知識・技能を問う問題と、「生物」の知識を基に与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考力、判断力、表現力等を問う問題がバランス良く出題されるようお願いしたい。また、各設問の文量や難易度、順序なども踏まえて、考察する時間が十分に担保されているかなど、「生物」の問題全体において、引き続き適切な出題をお願いしたい。

高等学校で科目選択をする際、共通テストにおける得点のしやすさが科目選択の大きな要因となっている現状では、「生物」履修者が年々減少していることが、ひいては生物学全体の振興に影響を落とすことにつながりかねない。「物理」「化学」「生物」「地学」の4科目で平均点や得点のちがひ等により差が生じないように、今後も問題の難易度の平準化を是非図っていただきたい。

今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、共通テスト本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように引き続き配慮をお願いしたい。

最後に、今年度の共通テストは昨年に引き続き、受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたこと、本委員会の提案を真摯に受け止め、改善に向けてしっかりと取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。